



イラスト・岩佐莉花

やや昔のことだが、居酒屋で「お酒ください」と注文したら、親しい先輩男性から「おまえは『お酒』なのか。男は『酒』と言っもんだ」と言われた。言葉にこの「お」を付けるかどうか。日本語ではなかなかの問題だ。阿川弘之さんの「食味風々録」に料亭の仲居さんが「A」と言うのが気に入らないとある。「外来語に『お』をつけるな」とも。そんなことが柳瀬尚紀さんの「日本語は天才である」で紹介されていた。確かに外来語は「お」が付かないのが一般的。だが日常語に「お」が付く場合もある。「おソース」「おスポン」「おトイレ」…。逆に「お」を取ると意味をなさなくなる言葉



左の記事を読んで、下の問いに答えましょう。

1 空欄A～Dに入る言葉を、次の中から選び、記号で書きましょう。

- ㊦ おもちや
- ㊧ おしぼり
- ㊨ おビール
- ㊩ おにぎり

A		B	
C		D	

④ おビール、おいしい

2 空欄E～Gには男か女のどちらかが入ります。それぞれ入る言葉を書きましょう。

E		F		G	
---	--	---	--	---	--

室町時代ごろに女性語の習慣

もある。「おでん・B・おかず」などだ。おでんは「田楽」、Bは「持ち遊び」から。おかずは「品数の多さ」からだ。今は「一品」でも言う。さらに「おひや・C・D」などでは「お」を取ると意味が変わってしまう。

1997年の文化庁「国語に関する世論調査」では、E性の方がF性よりも多くの言葉で「お」を付けている。柴田武さんの「『お』の付く語・付かない語」でも「お」は「食事に関する語にはよくつく」し「女性の日常生活であり使わない語にはつきにくい」。

大野晋さんの「日本語の年輪」によると「おいしい」は女性が使った「味がいい」を意味する古い言葉「いしい」に「お」がついたもの。その言葉の使用者が時代を経て広がり、G性語の「うまい」の方はやや品格の悪い語となってしまった。

大野さんによれば、女性語の確立は室町時代以降、結婚が嫁取婚となり、女性が夫の家に入られ、そこから出られなくなった時期と重なる。家で女性が丁寧な言葉を使わなくてはならず、「お」を付ける女性語の習慣が室町時代ごろからはつきりしてきたという。

「お」の付く言葉にはそんな歴史も反映しているようだ。「お受験」という、やゆや自嘲を含んだ言葉も定着し、今や辞書に載っている。この男女平等の時代、「お」の付く言葉はどう変化していくだろうか。

NIEワークシートのこたえ（2024年8月30日公開）

◆ワークシート「「お」の付く言葉(国語)」 2024.8.29付 夕刊 3面 解答

1 A ウ B ア C イまたはエ D イまたはエ

2 E 女 F 男 G 男